

Bloom!

\ 叡智の芽吹き /
医科歯科大



国立大学法人
東京医科歯科大学
TOKYO MEDICAL AND DENTAL UNIVERSITY

March 2021

no.30

自律と協調で 明るい未来へ



国立大学法人
東京医科歯科大学
TOKYO MEDICAL AND DENTAL UNIVERSITY

〈編集後記〉

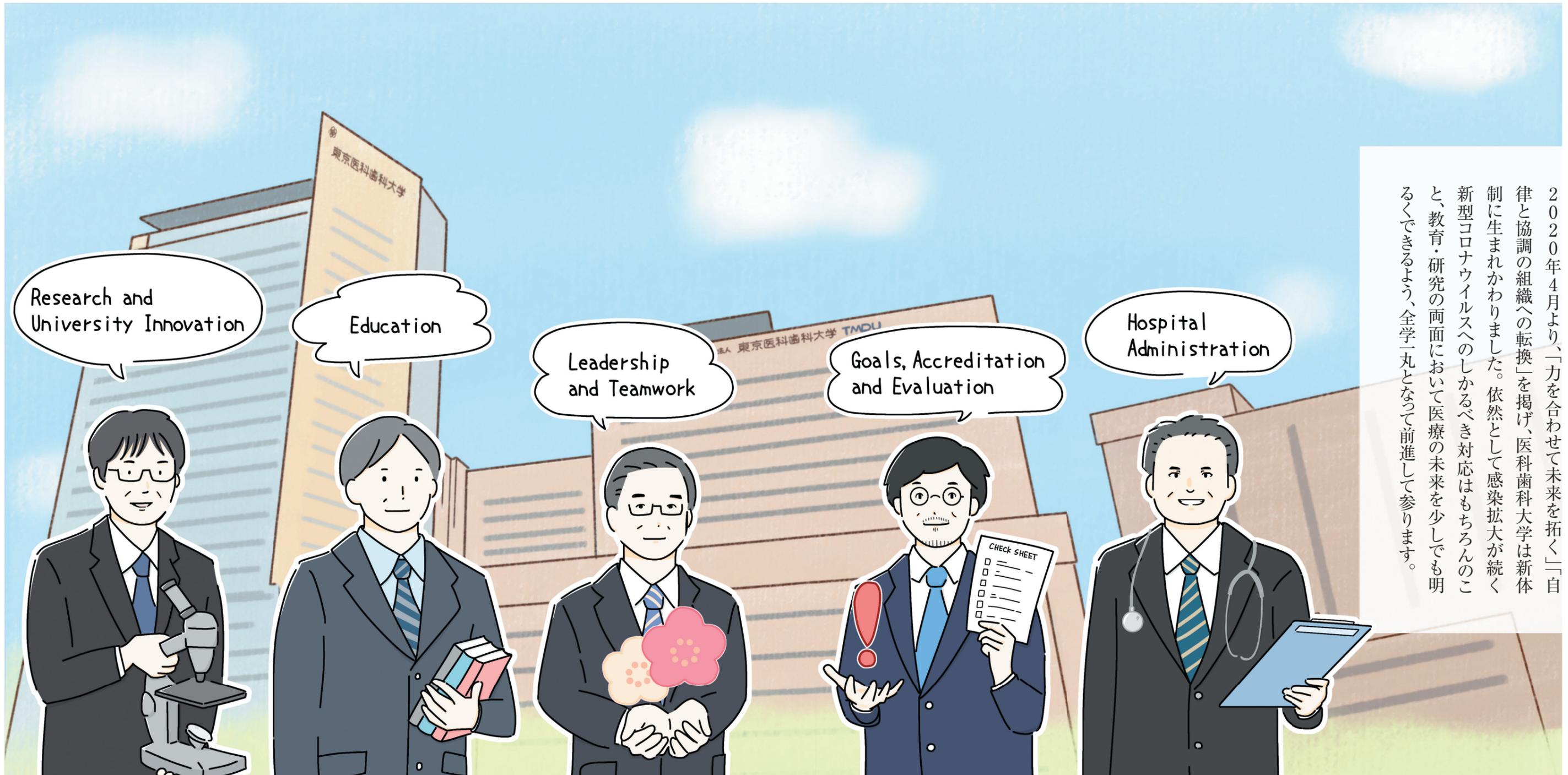
2020年4月に田中雄二郎学長が就任し、もうすぐ1年が経とうとしています。前号は「コロナ特集号」として、本学の新型コロナウイルス感染症への取り組みを紹介しましたので、今号では改めて田中学長主導での新体制を特集しています。学長のインタビューでは、指定国立大学法人の認定と機能強化棟の整備を2本柱に、これからの運営方針と展望についてお話を伺いました。

特集2では「育児と働き方」をテーマに座談会を行い、様々な立場の教職員4名に、ご自身の体験談を交えながら育休制度や仕事との両立などについて語っていただきました。

「Bloom! 医科歯科大」では、ソフト面、ハード面ともによりパワーアップしていく医科歯科大を今後ご紹介してまいります。

発行：国立大学法人 東京医科歯科大学
〒113-8510 東京都文京区湯島 1-5-45
URL www.tmd.ac.jp/
編集：国立大学法人 東京医科歯科大学
総務部総務秘書課広報係
E-Mail kouhou.adm@tmd.ac.jp
編集協力：文化工房
印刷：サンエー印刷
デザイン：Kuwa Design

©国立大学法人 東京医科歯科大学
本誌記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。



2020年4月より、「力を合わせて未来を拓く」「自律と協調の組織への転換」を掲げ、医科歯科大学は新体制に生まれかわりました。依然として感染拡大が続く新型コロナウイルスへのしかるべき対応はもちろんのこと、教育・研究の両面において医療の未来を少しでも明るくできるよう、全学一丸となって前進して参ります。

4 **特集1**
自律と協調で明るい未来へ

- 東京医科歯科大学の運営方針、理事からのメッセージ
- 指定国立大学法人の指定を受け、さらなる飛躍を
- 地域と世界に開かれた大学の新たな象徴 機能強化棟を整備

10 **特集2**
子育てとキャリア形成
～自分らしい働き方の推進

14 **医療研究最前線 未来医療を拓く**

- 免疫アレルギー学分野 佐藤 莊教授
- 健康推進歯学分野 相田 潤教授

16 **医療にかかる思いを聞く 医科歯科人**

- 歯科衛生保健部 足達淑子部長

18 **活躍する医科歯科人 卒業生の今**

- 株式会社トクヤマデンタル つくば研究所 豊田真奈氏

19 **自ら問い、自ら導く学生たち 医科歯科大生File**

- 医学部 保健衛生学科 検査技術学専攻 4年 荻野芽生さん

20 **附属病院訪問**

- 医学部附属病院 高気圧治療部

21 **For unity vol.1**

22 **TMDU Topics**



4月から東京医科歯科大学のHPがリニューアルします



理事・副学長(医療担当)
大川 淳

診療面においては、数年間かけて機能強化棟建設と医歯一体化を推進します。まず、2021年10月から一つの病院としてまとまり、「東京医科歯科大学病院」となります。重症・難病・口腔領域で傑出した診療体制を敷いて文字通りトータル・ヘルスケアの提供体制確立を目指します。2023年に運用を始める機能強化棟には、ERやICUを移設するとともに、高機能手術室を増室します。今後、医療情報システムの統一やIR (Institutional Research) 開発を全学的に進めて、業務効率化、ビッグデータ研究を促進します。



理事・副学長(目標・評価担当)
木村 彰方

2021年度は第3期中期目標・中期計画期間の最終年度を迎え、同期間中の活動成果が評価されます。また、2022年度からは第4期の中期目標・中期計画期間に入ります。本学は、2022年度から指定国立大学になりますが、「知と癒しの匠」を創造し、トータル・ヘルスケアを実現するとのミッションを達成するために、その実現に資する中期目標を設定し、中期計画を達成評価指標とともに開示して、国民の負託に応えます。

東京医科歯科大学の 運営方針

2020年4月に学長に就任して、1年が経とうとしています。これまで東京医科歯科大学が掲げてきた「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」という理念は、学長が交代しても変わるものではありませんから、引き続き大切にしていきたいと考えています。これに加えて、私は学長就任時に「力を合わせて未来を拓く」という方針を掲げました。これは、2020年春以降の新型コロナウイルス感染症に対する取り組みにおいても、力を結集して困難に正面から立ち向かう意志を込めた「患者を守る、仲間たちを守る」という

合言葉につながっています。

あわせて、「教職員全員の自律と協調による開かれた明るい大学」をつくることを目標に掲げていますが、「自律と協調」とは、教職員の個人が自律的に考え行動しつつ、お互いに協調しながら一体感を生み出していく姿勢です。

私は学長就任以来、ダイバーシティやインクルージョンの重要性も強調してきましたが、これが「開かれた」というフレーズに端的に表れています。これらを踏まえて、関わるすべての人々が前向きになれる「明るい大学」にすることが最終的な目標です。さらに、このたび指定国立大学法人の指定を受けたことを追い風に、トータル・ヘルスケアの新たなモデルを社会や世界に対して発信していくことが、これからの私たちに与えられた重要な使命だと考えます。



理事・副学長(研究・改革担当)
古川 哲史

本学は2022年より指定国立大学となり、トータル・ヘルスケアを実現する医療系総合大学を目指します。このため、医学科・歯学科、そして看護学・検査学・口腔保健工学・諸研究機関が一丸となったインクルーシブな取り組みを行います。革新的な研究を行うにはパッションが必要です。研究者が学問的自由と責任をもって夢の実現にチャレンジできる文化・環境を醸成し、社会的インパクトのある研究の発信につなげたいと考えています。



理事・副学長(教育担当)
若林 則幸

社会が真に求める医療者、世界の第一線で活躍する研究者の育成を図るため、授業方法の検証とともに教育・研究組織の強化を図り、他大学との連携教育、ヴァーチャルを活用したオンライン教育、多様なプログラムによる国際交流、データ科学やAIの教育などの導入に取り組めます。カリキュラム改革により授業の内容と方法を常に検証するシステムを整備し、情報技術の革新によって起こる医療の急速な進化を牽引するリーダーを育成します。

特集1

自律と協調で 明るい未来へ

学長
田中 雄二郎



①1966年 麻布中学校入学時、父親と
②1978年 医学科の友人たちと北海道旅行(右端)
③2012年 医学部附属病院院長時代、研修医とともに

たなか・ゆうじろう
医学博士、東京医科歯科大学学長。1980年に東京医科歯科大学医学部医学科を卒業した後、1985年、東京医科歯科大学医学系研究科内科学博士課程を修了しています。研究分野は消化器内科学、医学教育学。東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授、東京医科歯科大学医学部附属病院病院長、東京医科歯科大学スポーツサイエンス機構機構長などを経て、2020年4月より現職に。

指定国立大学法人の指定を受け、さらなる飛躍を

2020年10月、東京医科歯科大学は文部科学省によって「指定国立大学法人」に指定されました。国内はもとより国際的な競争力を有する国立大学であると国から認証を得たことにはどのような意義とメリットがあるのか、また、今後これを機に東京医科歯科大学はどのような方向を目指すのか、田中雄二郎学長に語ってもらいました。



——東京医科歯科大学が指定国立大学法人に指定され、ますます国立大学改革の推進役としての役割が期待されています。

田中 このたびの指定国立大学法人の指定は、国から本学に対して質的な保証をいただいたものと受け止めています。社会的信用につながることはもちろん、今後の教育や研究を含めて大学が目指すべき方向性が明確になったという意味でも、今回の指定には大きな意義とメリットがあると考えます。大学が目指すべき方向とは、世代を超えて地球・人類の

指定国立大学法人とは？

以下の3つの点において、各要件で国内10位以内の優れた大学が認定されます

【認定基準】

研究力

科研費の新規採択が多いなど

社会との連携

受託・共同研究や寄附金収益の割合が高いなど

国際協同

留学生/海外派遣学生、海外共著論文が多いなど

指定国立大学法人になると…

●規制緩和により、財政基盤、研究力の強化や人材の確保を行うことができる！

- 例 資産活用の基準緩和 → 収益性の高い投資や債券発行で、大学の資金を増やすことができる
- 給与基準の規制緩和 → 世界的な研究者を高給で雇う事ができる

●国立大学全体のレベルアップのため、政策・規制緩和の提言ができる！

→ 国立大学全体のレベルアップや世界の有名大学と競うために、国立大学改革の推進役となる大学となる

東京医科歯科大学の目指すところ

世代を超えて地球・人類の「トータル・ヘルスケア」を実現する

世界中の人々に生涯を通じてあらゆる病気に対する医療を提供し、健康な生活を届けます。



- 研究力**
 - ◇重点研究領域研究の推進
 - ◇メディカルデータサイエンスの拠点形成
- 社会との連携**
 - ◇産学官民連携強化
 - ◇自治体・省庁との連携強化
- 人材育成・獲得**
 - ◇臨床医の視点を持つ研究者 (clinician scientist) の育成
 - ◇医療系情報科学者 (medical data scientist) の育成
- 国際協同**
 - ◇海外大学との連携強化
 - ◇若手研究者の短中期の海外滞在支援
- 財務基盤**
 - ◇寄附金等獲得体制強化
 - ◇データビジネス分野への展開

トータル・ヘルスケアを実現し、そのモデルを社会や世界に対して示すことに他なりません。医学部と歯学部が共存する大学としては最大規模である本学がトータル・ヘルスケアを提供することは社会的な使命といえるでしょう。今回の指定によってそのことを再確認するとともに、今後の展開の後押しをしていただいたいと思っております。

——トータル・ヘルスケアの実現を目指して、具体的にはどのような領域を重視されるのでしょうか。

田中 「教育」「研究」「診療」の三つの領域を柱に進めていきます。「教育」については、どのような人材を育てるべきか学内で議論した結果「臨床的な視点をもった研究者(クリニシャン・サイエンティスト)と科学的な視点で診療ができる臨床医(サイエンティフィック・クリニシャン)の育成」が重要であるという一つの答えに達しました。専門医療

に携わりながら新たな研究に取り組むことは、時間的・労力的にも困難ですが、その両立ができる環境を整備することこそが大学としての役割だろうと考えます。経済的な支援や、海外留学のサポートなど、診療と研究の両立が可能な環境づくりを目指していきます。

また、本学は東京外国語大学、東京工業大学、一橋大学との間で「四大学連合憲章」を締結していますが、現在はオンラインによって物理的な距離を克服できるため、協同での授業やディスカッションが可能になりました。こうした機会を活かして、ぜひ広い視野を獲得しながら、本質をつかむ力や共感力を育んでもらいたい。今般、本学がコロナ感染に前向きに取り組むべきだと判断した理由の一つに、この共感力があります。常に社会の問題に対して共感力をもつて接する姿勢は、学生に向けたメッセージにもなると考えたからです。

——「研究」と「診療」についてはいかがでしょうか。

田中 「研究」「診療」の充実もトータル・ヘルスケアを実現する上で必要不可欠です。「研究」については、学問の自由(アカデミック・フリーダム)が最も大切です。特定の分野に偏ることなく、多様な領域で自由な研究が

可能となる環境を整える必要があります。成熟して伸びている分野には資金や人材を投下して、これから発展する領域についてもその発展性や継続性が担保できるように保証をする考えです。さらに、研究の成果や知見を実際に使えるものにするための社会実装や政策提言など、社会に還元することを意識した視点も重視します。

「診療」については、最もトータル・ヘルスケアを実現する場であることを再認識する必要があります。1人の人間に対するトータル・ヘルスケアとしては、出生前から亡くなるまで、その人に寄り添うことが求められます。また、私たちは大学病院としては珍しく緩和ケア病棟も完備し、ゲリーフケアにも対応できることから、遺された方たちのケアまで含めたトータル・ヘルスケアの実現が社会的にも期待されています。そして、総合診療科をもち、かつ専門的な診療を行う医師からなる大学病院の利点を生かし、総合診療を基盤とした専門診療を展開します。こうした診療を通じて、明日の医療とはどのようなものかを社会に示していきたい。真に必要な医療とは何かを常に自問自答しながら、全員参加で力を合わせて邁進していきたいと考えています。



機能強化棟オープンスペースのイメージ図



エントランスのイメージ図

特集1 自律と協調で明るい未来へ

地域と世界に開かれた 大学の新たな象徴 機能強化棟を整備

東京医科歯科大学では、2020年度から機能強化棟の建設に着手。2016年に策定されたキャンパス空間の計画目標である「キャンパスマスタープラン」に基づき2022年度の完成を目指して現在整備が進められています。「新しい大学の象徴」となる機能強化棟の役割と意義について田中雄二郎学長に聞きました。

**免震構造を採用し
災害医療の拠点に**

「キャンパスマスタープラン」に基づくアクションプランのインフラ寿命化計画によって建設・整備が進む機能強化棟ですが、建物としてどのような特徴があるのでしょうか。

田中 機能強化棟は、地上7階、地下2階の建物になる予定ですが、まず建物の構造自体が学内の既存の施設とは異なります。これまで本学には耐震構造の建物はありませんでしたが、免震構造の建物はありませんでした。耐震とは、文字通り地震に対して建物が持ちこたえて倒壊を防ぐ機能ですが、地震による揺れが生じるため、医療機器などにダメージを与える可能性もあります。一方、免震構造の場合、建物を地盤と切り離すことで地震の揺れを直接伝えずに済むため、設備などへの被害を防げるのです。さらに建物内に自家発電システムも設置、医療情報システムのサーバーを設置することで自立型の施設となります。災害時に万が一、メイン病棟や外来病棟の機能が停止し

整備の第一歩として建設が進んでいます。

**開かれた大学を象徴する
地域・世界との接点へ**

「キャンパスマスタープランの基本方針にもなっている「地域と世界に開かれたキャンパス」を実現すべく、機能強化棟には「地域に開かれたオープンスペース」としての役割も与えられています。

田中 機能強化棟が建つ場所は

たととしても、ここだけは機能し、BCP(事業継続計画)が維持される。つまり機能強化棟は、災害医療の拠点としての役割を視野に入れた施設なのです。

災害医療の拠点となると、おのずと建物に入るのは手術部や集中治療室、ER(救急救命室)やICU(高度治療室)、ICU(集中治療室)が中心となります。今回のコロナ感染症への取り組みから、大学病院にとって重症系の患者を受け入れることは大きな使命だと痛感しました。こうした治療が最新の設備で行えることは私たちの大きな強みだと考えます。

——機能強化棟の役割の一つとして、医学部附属病院と歯学部附属病院の一体化も視野にあるそうですね。

田中 二つの病院の動線をスムーズにすることで両者の一体化を図りながら、病院としての機能をより一層強化していくねらいがあります。そのためには病院全体の改修が必要となり、機能強化棟もその一環として建設されることになりました。機能強化棟は、長期的なスパンによる病院再



機能強化棟の工事がスタートしました



機能強化棟完成イメージ図

JRと東京メトロ御茶ノ水駅目の前にあたることから、大学の正面玄関のような位置づけとして捉えています。地下2階は東京メトロ御茶ノ水駅のホームと直結し、医科A棟のエントランスまで直接エスカレーターとエレベーターでの移動が可能です。

そして、地上1階のホールにはカフェやギャラリーを設け、大学や病院を来訪する人だけでなく、電車の利用客や街を歩く人

たちが気軽に待ち合わせなどに利用できるオープンスペースにしたいのです。これは、私が掲げる「開かれた明るい大学」という目標にも沿うものだと考えます。建物に入った途端にいきなり大学や病院になるのではなく、徐々にグラデーションのように連なる空間づくりを目指し、機能強化棟を大学の新たな象徴として、地域・世界と大学・病院との接点にしたいですね。

今村聡子
副学長(事務統括)
男女共同参画担当
2児の母



特集2

子育てとキャリア形成 ~自分らしい働き方の推進

2008年に「女性研究者支援モデル育成事業」に採択され、「女性研究者支援室」を設置し、2010年に湯島キャンパス内に「わくわく保育園」を設置するなど、ワークライフバランスのサポートのためさまざまな制度を検討・導入しています。今年度、「ダイバーシティ&インクルージョンの推進」宣言を表明し、教育研究活動を通じて男女共同参画社会に寄与する人材の育成、安心して子育てや介護が行える仕事と生活の相乗効果(ワークライフシナジー)など、今後もさまざまな取り組みを推進していきます。

この座談会では、本学での育児支援の状況について、教員、医療従事者、事務職など、さまざまな立場での経験をもとに語っていただきました。

【WORK&Life GUIDEBOOK】
育児や介護に関するさまざまな制度やサポートが掲載されています。

Q 育休について感じたこと

佐藤 1人目の出産時には育休を取っていませんでしたが、後からあの時取っておけば良かったなと思ひ、2人目の時には出産の半年前から上司に相談し、育休を取得しました。自宅で上の子の面倒を見ながら、生まれたばかりの下の子の育児を同時にすることになったため、私も育休を取っていただいて本当に良

かったなと痛感しました。

4カ月間という長期間仕事を休んだことがなかったので、不安もありましたが、仕事とは違う育児の喜びや大変さを実感できましたし、復帰後も妻に育児を任せるのではなく、夫婦で分担することができて、育休で得たものは多いと感じました。

隅田 1年間、産休・育休を取得しましたが、既に同じ部署で育休を取っていた方が2名いたので、スムーズに取ることができたと思います。ただ育休中は、常に職場への復帰を思う1年間でした。育休は苦勞せずには取れませんが、復帰後、子育てと仕事をどう両立させるか、という心配がありました。特に、私は保育園が復帰直前まで決まらず、今でもよく覚えているくらい不安を感じたのですが、本学が運営する「わくわく保育園」の存在は心の支えでした。幸い区立の保育園に入園することができ、そして実家の支えもあり、恵まれた環境での子育てができたことに感謝しています。

齋藤 妻が昨年の4月に職場復帰の予定でしたが、緊急事態宣言が発出されたため、妻は職場の上司に相談して在宅勤務に切り替えてもらうことになりました。この時思ったのは「まだまだ



佐藤 央
医学部附属病院
看護部ICU病棟
救急看護認定看護師
2児の父

だ女性が育児のために仕事を制限しなければならないケースが多いのではないかと。確かに、昔に比べれば男性が育児や家事に関わる割合は増えているとは思いますが、まだ足りないのではないのでしょうか。今は9対1、8対2くらいの割合で女性の負担が大きくなるならば、これを5対5にするにはどうすればいいのか、我々男性も真剣に考えていく必要があると感じました。単純に男性が育児や家事に関わる量を増やすだけでは

く質をあげて、男性が積極的に育児や家事に関わっていく文化をつくることで、女性の職場復帰もしやすくなるのではないのでしょうか。

今村 私は、1人目の子どものときは1年間あまり不自由なく子育てをできたのですが、2人目の子どものはつわりもひどく、夫と育児・家事のやり方を話し合いました。幸い夫は共働きに理解があり、50対50という私の提案を受け入れてくれたので、育休明けも比較的スムーズに復帰できました。



隅田由香
大学院医歯学
総合研究科
顎顔面補綴学
講師
1児の母

齋藤 暁
医学部附属病院
事務部
企画室
企画・予算係
係長
2児の父



育休をきっかけに、改めて夫婦での共同作業の大切さを感じました。

Q 育児と仕事を両立する上で心掛けていること

隅田 子育て世代ではない同僚や自分が指導する学生たちが、育児と仕事の両立に対してネガティブな印象を持たないように気をつけています。テレワークの推進により、働き方も家庭にあわせて工夫できるようになったのは、とてもありがたいですね。ただ、仕事との関係性は人によって異なりますし、子育ても子どもの年齢によって変化していくため、育児と仕事の両立にも多様性があると思っています。自分も含め経験していないことの共有は難しい部分がありますので、周囲への思いやりや感謝の気持ちを忘れないようにしています。

今村 私も、育児をするにあたって勤務時間自体は制限をかけたのですが、時間内はいつ誰が来ても柔軟に対応し、かつ短時間でも効率よく業務を進めるように努力しました。少なからず職場の仲間に迷惑をかけてしまうことはあるので、時間内は集中して仕事をし、生産性を高めるよう注力しました。

ライフバランスを保つための制度として捉えてみては



しまうものだと思っています。SDGsにも繋がりますので、育休は、ぜひ女性だけでなく男性にも取っていただきたいですね。

佐藤 育休を取った職員、子育て中の職員の周りで働くスタッフの負担が増えすぎないように、余裕のある人数の人員が配置されれば、みんなが気持ちよく働きやすい環境になるのではないかと

管理する職になった今は、周囲や管理職が、育児する職員を理解するだけでなく、みんな何かしらの制約を抱えながら仕事に当たっているという当事者意識をもつことも大事だと思っています。

男性が積極的に育児や家事に関わる文化が必要です



と感じています。

今村 今の日本の社会では、いまだに女性の育児と家事の負担が大きくなりがちなので、男女間の差がなく仕事と家庭の両立ができるよう支援する制度にすることで、たとえば今の若い女性がキャリアアップしてきたときに、性別問わずベストな選択をしてほしいです。そのために、組織の在り方としては、多様な働き方・働き方を包括しサポートできる組織にしたいですね。

隅田 制度を作るだけでなく、手軽に利用できるように組織がサポートして

子育てだけでなく、自分自身の病気や家族の介護など多くの出来事が人生にはあります。「この制度は自分には関係ない」と無関心にならないようにするために、たとえば「ライフバランス休暇」のような、みんなの生きがいのための休暇、親やパートナーの介護のための休暇といった運用をして、さまざまな価値観の人たちが自身のライフバランスをうまく保ち、互いに価値観を共有して認め合えたら、今以上に強く、しなやかな組織になれるような気がします。

齋藤 私は、育休のいいところの一つは、自分自身の視野が広がることだと思う

佐藤 今はテレワークで部署内の会議を自宅でできるシステムもあります。が、仕事を家庭に持ち込む量は最小限にして、可能な限り育児と家事に関する時間を増やしたいですね。休日は子供2人を連れて公園に行くなどして、妻の自由な時間をつくることを心がけています。公園に行っても周りもお父さんが多く、社会の在り方も変わっているのかなと感じています。

齋藤 確かに、近所でも休日は男性が育児や家事を積極的にやるようになっていないので、平日は妻に任せっきりになっている点は見直すべきだと感じています。一方で、仕事も組織で取り組むという点では、1人ではなくチームで助け合いながら両立していくことが大切だと思っています。看護師さんは、夜勤がある方も多いと思いますが、どうされているのですか？

佐藤 その点については、我が家も含め家庭内の調整が必要だと思います。看護部内でも、育児をしながら働いている人は、夜勤の調整や保育園の送迎時間など、他のメンバーが業務分担をしながらサポートするのですが、やはり周りの理解と協力が不可欠だと感じます。

ています。育休中は、早く職場に戻らなければ職場に穴があいてしまうといった不安を持つ人も多いと思います。が、育児や家事に携わることで視野が広がり、確実にパワーアップして職場に戻ってくることもできます。こうしたメリットの部分を職場の仲間といかに共有できるのかもポイントではない

前例を増やして男性も育休取得希望を出しやすい職場に



いでしょか。
今村 おっしゃる通りですね。育休期間中にたくさんの学びを得て、パワーアップして職場に帰ってきてその成果を仲間に還元する、という気持ちでぜひ積極的に育休を活用していただきたいと思っています。そうすれば個人にとっても、組織にとっても、得るものばかりで失うものは何もないと思います。そして、一緒に働く誰もが「お互い大変ですよ」という気持ちを持って助け合っているような職場環境にしていきたいですね。

—— お忙しい中、座談会にご協力いただき、ありがとうございました。

個々人がその時ベストな選択ができる環境づくりが重要

Q 今後期待すること

佐藤 私が育休を取った理由の一つとして、先輩の男性看護師にも育休を取得してほしいという思いがあったからです。男性の育休は前例も少なく、私自身も職場に希望する際は人手不足の中で、取得していいのかわ迷いがありました。今回の広報誌のように、もっと男性育休取得者の声を拾い上げて組織として積極的に希望を出しやすい雰囲気づくりを進めてほしいと思います。

隅田 制度はフルに使わないと消えて

【育休の相談・申請などについて】

- 申請・問い合わせ窓口
- 保育支援、ワークライフバランスのサポート
 - 学生女性支援センター
- 休暇、手当などの人事制度の利用
 - 人事労務課

未来医療を拓く

マクロファージのほか
好中球、好塩基球も含め
「ミエロイド細胞の地図」を
描きたい



免疫アレルギー学分野
佐藤 莊教授

さとう・たかし
2010年大阪大学医学系研究科博士課程修了、医学博士。同年大阪大学免疫学フロンティア研究センター特任研究員、2013年同センター助教、2018年同センター准教授を経て、2020年より現職。2017年、「疾患特異的マクロファージの機能的多様性の研究」により、さまざまな疾患に特異的に働く複数のマクロファージの存在を立証し、日本学術振興会賞、文部科学大臣若手科学者賞を受賞。

健康推進歯学分野
相田 潤教授

あいだ・じゅん
2003年北海道大学歯学部卒業。2007年北海道大学大学院歯学研究科博士課程修了(歯学博士)。University College London 客員研究員、東北大学大学院歯学研究科国際歯科保健学分野准教授などを経て、2020年より現職。専門分野は公衆衛生学、社会疫学。歯科疾患の健康格差、口腔と全身の健康の関係、ソーシャルキャピタル、東日本大震災による被災者の健康に関する研究に従事。

社会的経路を考慮した
疫学研究により
口腔の健康と認知症の
関連を解き明かす



疾患特異的マクロファージ
その大いなる可能性

白血球の一種であるマクロファージについて、近年、個別の疾患に特異的なマクロファージのサブタイプがあることが明らかになった。こうした「疾患特異的マクロファージ」の研究をリードしているのが、免疫アレルギー学分野の佐藤 莊教授である。

「マクロファージは1世紀以上前に見つかった細胞ですが、他の免疫細胞にはサブタイプという多様性があるのに対し、マクロファージは1種類しかないと考えられてきました。しかし、私は他の免疫細胞と同様に、体内には複数のマクロファージがあるのではないかと考え、これまで研究を進めてきました」

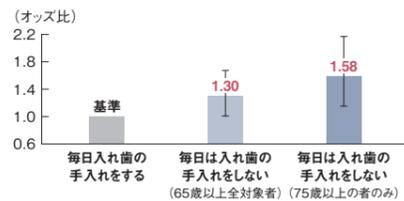
その結果、2017年に佐藤教授は線維症の発症に関与する新規のマクロファージサブタイプを発見し、2020年にその細胞と非免疫系のクロストークを明らかにした。線維症については、未だ有効な治療法が存在しないことから、これらの2つの発見をもとに、現在線維症を抑制する薬の開発が進められている。

義歯を毎日清掃することが
誤嚥性肺炎予防に有効

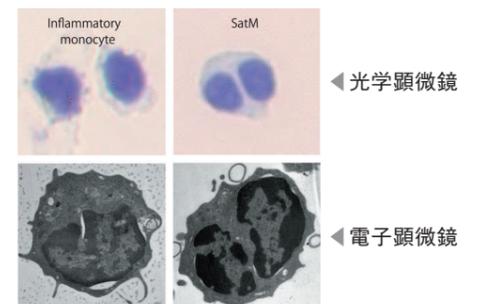
近年研究が進む口腔の健康と全身の健康の関係性。特に、口腔ケアが誤嚥性肺炎予防に有効であることは、さまざまな実証を経験して広く知られています。しかし、これまでの口腔衛生と肺炎の関連に関する研究は、入院患者、介護施設入所者を対象としており、地域在住の高齢者に対する研究はありませんでした。

健康推進歯学分野の相田潤教授は、65歳以上の地域在住高齢者約7万人を対象に、義歯の清掃頻度と、過去1年間の肺炎発症の有無の関連を横断研究で調査。その結果、義歯を毎日清掃

入れ歯の清掃頻度と過去1年間の肺炎発症との関連 (n = 71,227)



*年齢、性、喫煙歴、所得、教育歴、現在歯数、ADL、脳梗塞・認知症の既往、肺炎球菌ワクチン接種の影響を統計学的に除外
Kusama T, Aida J, Yamamoto T, Kondo K, Osaka K: Infrequent Denture Cleaning Increased the Risk of Pneumonia among Community-dwelling Older Adults: A Population-based Cross-sectional Study. Sci Rep 2019, 9(1):13734.



新たに見つかったマクロファージ (SatM) SatM細胞には、通常のマクロファージと異なり、核が2つある。

さらに佐藤教授は、線維症に加え、がんや認知症、新型コロナウイルス感染症についても、疾患特異的マクロファージという考え方に基づいた複数の研究を進めている。

「基礎研究と臨床研究の距離が近く風通しの良い本学で、今後、マクロファージはもとより、好中球や好塩基球なども含めた、ミエロイド細胞の多様性を解き明かし、それらの相互作用、疾病や非免疫系との関係性を明らかにすることで、ヒトの体内におけるミエロイド細胞の地図である『ミエロイドセル・アトラス』のようなものを作っていければと考えています」

しないことにより、肺炎発症リスクが1・30倍、75歳以上の人では1・58倍高いことが明らかになりました。「一般の高齢者でも、義歯や口腔の汚れが誤嚥性肺炎発症のリスクを上昇させる可能性を示した初めての研究です。一般の高齢者の口腔衛生状態も清潔に保つことが、日本人全体の誤嚥性肺炎の発症を減らすことに繋がると考えられます」

さらに相田教授は、生物医学的メカニズムだけでなく、社会的バリエーションを特に考慮した口腔の健康と全身の健康の疫学研究に注力。現在は、口腔の健康と認知機能の低下に関する研究に取り組んでいます。

認知症のリスク因子に「社会的孤立」がありますが、相田教授の研究では、歯が少なく義歯も使わない高齢者は、歯が20本以上残る高齢者より閉じこもり状態になるリスクが高いことが分かっています。「社会的孤立の要因に口腔の健康の悪化があると考え、検証を進めています。先進的な解析手法による因果推論を進め、社会的経路の観点から口腔状態と認知症の関連を解明していきたいと考えています」

歯科衛生保健部部長

足達淑子

組織を動かすのは人。 医科歯科大の歯科衛生士として 胸を張って働く人材を育てる

近年、全身の健康やフレイルなど、さまざまな観点から注目を集める口腔ケア。口腔保健衛生の専門家である歯科衛生士の活躍の場も広がる中、歯学部附属病院 歯科衛生保健部のトップとして歯科衛生士の育成や資質向上に力を注いでいるのが、足達淑子部長です。

国内の病院では唯一の 部長を務める歯科衛生士

「歯科衛生士が単独の部」として活動している病院は国内では珍しく、部長職に就いている歯科衛生士も、全国で私だけなんです。歯科衛生士が責任を持って自らの職務に当たり、処置の記録も自分たちで書いてきた伝統がある

る医科歯科大だからこそ、実現した体制だと思っています」

そう語るのには、歯科衛生保健部発当初から部を束ねる足達淑子部長。同部の32名の歯科衛生士は、外科系を除くあらゆる診療科・専門外来に配属され、特に口腔ケア外来では、歯科衛生士が主体となり、歯科医師と連携して保健指導や処置に当たっています。また、最近では医学部附属病院で周術期口腔機能管理も行っています。

「患者の社会的立場や家庭環境も考慮し、先生方とは異なる角度からの意見を伝え、しっかりとディスカッションをしていくところに口腔ケア外来のやりがいを感じます。私が35年前に入職した時は、歯科衛生士はたった6名。一部の科での診療室の管理業務が中心でした。あの頃のことを思うと、今が嘘みたいですね」

仕事の魅力は人との関わり 患者の声に耳を傾ける

足達部長は、長年にわたり、口腔ケアのプロとして患者と向き合い、歯科衛生士の活動の場を広げることに力を尽くしてきました。

「口は、呼吸や食事だけでなく、会話や感情表現にも欠かせない重要な器官です。その口を、衛るのが歯科衛生士の仕事。最近、口腔ケアと全身の疾患やフレイルの関係に社会的な関心が高まっていますが、東京医科歯科大学では、以前から嘔むことや滑舌にも注目して治療を行ってきました。先生方と取り組んできたことが、ようやく社会にも広がってきたと感じています」

多忙な部長職にあっても、臨床で患者と関わる時間を欠かすことのない足達部長。患者と接するときは、常に患者の生の声に耳を傾けます。その原点は、歯科衛生士学校での学外実習やフィールドワークにあります。

「患者さんの行動変容を促すためには、こちらが教えたり伝えたりする前に、まず患者さんの意見聞き、対話をするのが不

可欠です。学生時代、保健所、保育園、企業内診療所などいろいろな場所を実習を経験し、先輩方が上手に歯科の情報を伝えていた姿に感銘を受けました。岩手県でのフィールドワークでも、地域の方へのアンケート調査を通じて、先入観や思い込みは失敗のもとだと気付くことができました。人と関わる歯科衛生士の仕事の魅力と基本を学んだことが、今に繋がっていると思います」

また、キャリアの中で最も長く携わってきたのが、障害者歯科です。約20年前から関わっている都内の特別支援学校では、歯磨きなどの保健指導にとどまらず、摂食を含めた幅広い指導に取り組んでいます。

「障害がある子どもも、幼稚園から高校を卒業するまでしっかりと保健指導を続けると、きれいな歯磨きができるようになります。生徒たちは、口がきれいになったことで就職もしやすくなったそうです。教員の方に「虫歯にならなければいい、というだけではいいですね」と言っていたいた時には、私たちの思いが伝わったことととてもうれしかったですね」

生き生きと働ける職場を 次の世代につなごう

足達部長は、部長に就任する際、「人材育成」を目標に掲げました。看護部などを参考に、スタッフと試行錯誤を重ねてマニュアルやカリキュラムを作り、新人教育やキャリア支援の仕組みも整えています。さらに、東京医科歯科大学にとどまらず、全国の大学病院に勤務する歯科衛生士全体の資質向上のため、備えるべき要件の整備などにも携わっています。

「組織は人がいなければ動きません。医科歯科大の歯科衛生士として、胸を張って働く人材を育てることが目標です。当部のスタッフはよく『楽しそうに働いているね』と言っていた

だきますが、これからも全員が生き生きと働ける職場をつくっていきたい。そして、その職場を後輩にしっかりとつないでいくことが、部長としての私の責務だと思っています」



あだち・としこ
1986年、東京医科歯科大学歯学部附属歯科衛生士学校卒業。同年4月から東京医科歯科大学歯学部附属病院に歯科衛生士として勤務。2009年、歯科衛生保健部発足に合わせ、歯科衛生保健部長に就任。



退職者を送る会での部員との集合写真



活躍する医科歯科人

卒業生の今

現場の歯科技工士を助ける 新製品を開発したい

株式会社トクヤマデンタル つくば研究所

豊田真奈氏

とよだ・まな

2018年、東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科口腔保健工学専攻卒業。3年生の時に海外研修奨励制度により、スウェーデン・ヨーテボリ大学歯科技工科に3週間留学。卒業後は歯科器材メーカーの株式会社トクヤマデンタルに入社。つくば研究所で製品開発業務を行っている。



歯学部口腔保健工学専攻を卒業後、歯科医療用器材メーカーに勤務する豊田真奈さん。「歯科技工士」という職業との出会いは、高校1年生の時に参加した、東京医科歯科大学のオープンキャンパスでした。

「口腔保健工学専攻のプログラムで模擬実習を体験し、ものづくりを通じて医療に貢献できる歯科技工士に興味をもちました。幼い頃から手作業で何かを作ることは好きで得意な方でしたので、自分が得意な分野と、多くの人の役に立つ医療が結びつく職業だと感じ、将来の目標として目指すようになりました」

現在は、研究開発部門の一員として、義歯関係の新製品の開発などに日々力を尽くしているそうです。歯科材料の開発には、義歯に関する知識、CAD/CAMの技術など、大学時代に学んだ多くのことが生かされている一方で、材料に関する化学などの幅広い知識も求められるため、化学を専門とする同僚と意見を交わしたり、専門書を読み込んだりしながら、新たな知識を積み重ねて実験に毎日向き合っています。

「試験片の作り方一つとっても、

最初はコツが分からず、苦勞することばかりでした。実験には失敗

が付きものですが、その都度改善すべき点を見つけ、前向きに取り組んでいます。周囲から学ぶことは多いのですが、歯科技工士資格を持つ私の知識が必要とされる場面もあり、同僚と力を合わせて開発を進めていくことに、仕事の面白みを感じています」

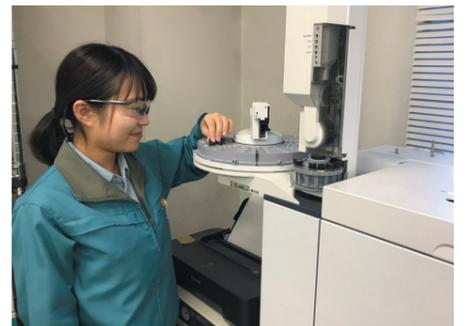
豊田さんがメーカーの研究職の道に進んだのは、歯科技工士の働く環境を改善したいという強い思いがあったからです。

「学生時代から、歯科技工士の長時間労働や粉塵などによる健康被害は大きな課題だと感じていました。これまでにない新たな製品を開発することで、歯科技工士の作業の効率化や作業時間の短縮を図り、現場のみなさんの労働環境の改善に繋がりたい。そう考



株式会社トクヤマデンタル

歯科医療用器材の製造・販売、輸出入、器械・器具の修理などを事業内容とする歯科器材メーカー。1978年、徳山曹達株式会社（現・株式会社トクヤマ）が和精精密歯研株式会社とトクヤマデンタルとなった。同社製品は現在、ヨーロッパ、北米、アジア、オセアニアなど全世界70カ国以上で使用されている。国内拠点は、つくば研究所のほか、本社、全国6営業所、鹿島工場。従業員150名。



ガスクロマトグラフで開発中の材料の成分確認を行っています

えて、この仕事を選びました。歯科医療全体の現状とニーズをしっかりと把握し、より便利で使いやすい製品を開発していきたいと考えています」
携わった製品が上市され、歯科技工士だけでなく歯科医師、歯科衛生士の役に立つ日を目指して、一歩ずつ前進しています。

自ら問い、自ら導く学生たち

医科歯科大生 File

高校時代、医療メーカーのCMをきっかけに、検査技術の発展に貢献する臨床検査技師を志したという荻野芽生さん。「視野を広く持ちつつ、足下の社会の持続的発展に寄与できる人になりたい」という夢を抱き、授業や部活動に全力で取り組む4年間を送ってきました。

学びの中でも、大川龍之介教授の分析化学の授業で学んだ「異常値を見極める力」の重要性は、深く心に刻まれているといいます。

「検査の手違い、機械の故障など、さまざまな要素を念頭に置いてデータをみる意識を持つようになりました。臨床検査技師には、検査結果を伝えるだけでなく、誤ったデータを「伝えない」という、関所のような役割もあると感じた、とても印象深い授業です」

4年生で受けたチーム医療入門では、臨床検査技師の負う責任を強く認識する大切な経験もしました。



臨床検査技師の使命と

発信力の大切さを

学んだ4年間

No.020

医学部 保健衛生学科
検査技術学専攻 4年
荻野 芽生さん

おぎの・めい
中学時代の恩師に教わった「Stay local, Look global」という言葉が座右の銘。3年夏にはタイ・チュロンコン大学への海外派遣プログラムに参加し、現地の学生の熱意や語学力に刺激を受けました。

「医学科や看護学専攻の学生と症例を検討する中で不適切な検体による異常値に気付いたのですが、その検査結果を判断材料から外すべきという意見に理解を得ることができず、最終的にチームとして誤った診断を導いてしまったことがあります。これまで学んだことが自分に身につけてきたと実感できた半面、臨床検査技師は患者を誤診から守る最初の砦であると痛感しました。これからさらに経験を重ね、他職種から信頼の置かれる検査技師を目指したいです」

部活動の「ピアノの会」では、コンサートのために半年以上練習を重ねるなど、どんなことにも粘り強く取り組む荻野さん。卒業研究では、血液検体の抗酸化能の測定法の検討に打ち込み、卒業後も東京医科歯科大学大学院で研究を続けます。

「将来は、研究室のテーマである、心血管疾患の早期病態予測やリスク予測に役立つバイオマーカーの発見や、その物質の検査法の開発に貢献したいと考えています。使命感と熱意を持ち、自分のテーマを広く発信できる研究者になりたいです」



医学部附属病院

歯学部附属病院

2021年10月より

「東京医科歯科大学病院」

になります。

今後も順次一体化が
進んでいきます

検査部門

血液検査を
1カ所に集中



薬剤部門

業務ごとに医科棟・
歯科棟に振り分け



放射線 部門

現行の連携を
さらに深める



医療安全 部門

安全管理指針と体制の
一本化(検討中)

医療連携 部門

内部での相互紹介
促進(検討中)

感染対策 部門

感染対策基準の
統一化(検討中)

機能強化棟を医科棟と歯科棟の相互エントランスとして機能の集約化や建物の有効活用により超高齢化社会に向き合うために最高水準の医療環境の整備を目指し両附属病院を一体化します。



医学部附属病院 高気圧治療部

放射線障害やスポーツ外傷への治療と研究を实践



上/国内最大級の
高気圧酸素治療装
置。病院地下一階
の救命救急センタ
ーに隣接していま
す。ゆったりとした空間で
複数の患者さんを
同時に治療するこ
とができます



国内最大級の治療装置で
年間約6000人を治療
高気圧酸素治療(HBO)は、2気
圧以上で100%酸素を吸入し、全身

に酸素を供給する治療法です。東京医
科歯科大学では1966年に高気圧酸
素医学の研究が始まり、2001年に
高気圧治療部が設立されました。現在
は、16名同時に治療可能な国内最大級

の高気圧酸素治療装置を使い、年間約
6000人の患者を治療しています。
HBOの代表的な治療対象として
は、減圧症、空気塞栓、感染症、末梢循
環不全などが挙げられます。中でも、
部長の柳下和慶准教授が重視するの
が、晩期放射線性障害に対する治療
です。
「骨盤内臓器のがんに対する放射線
治療後に生じる直腸や膀胱からの出
血は、患者のQOLを著しく損ないま
すが、HBOはこうした重篤な副作用
の進行を止めることができます。非常に
貴重な治療法です。また、放射線性の
顎骨壊死に対する治療でも、50%以上
の治癒率を示した症例が94%と、高い
有効性が示されています。将来的に
は、全国でがん治療とHBOによる副
作用や合併症の治療がセットで行われ
るようになってほしいと願っています」
また、スポーツ外傷への治療も積極的
に実施しています。HBOは、打撲や捻
挫などの患部の低酸素環境を改善し、
腫れの軽減、損傷した組織の回復を早め



高気圧治療部のメンバー。医師、臨床工学技士が協力して、24時間対応しています

る効果があります。既に多くのトップア
スリートが治療を受け、「腫れが早く引
き、機能回復も早まった実感がある」と
の声が届いているといいます。
「スポーツ外傷への治療はまだチャレ
ンジングではありますが、今後も研究
と治療を継続し、選手の早期競技復帰
を支援したいと考えています」



柳下和慶
准教授

やぎした・かずよし
高気圧治療部部長。スポ
ーツに関する外傷や疾病
の診断・治療に特化した
医学部附属病院スポーツ
歯学診療センターのセ
ンター長も務めている。

東京医科歯科大学基金 寄附者芳名録

未来の医療人育成に向けた募金にご支援をいただいた皆様のご芳名を掲載いたします。
今後とも引き続き、東京医科歯科大学へのご寄附・ご支援を、お願いいたします。

■2020年1月1日から11月30日の寄附者を掲載しています(50音順/敬称略) ■匿名を希望された方については、掲載しておりません

新たに銘板に掲載された方のご芳名

MISSION BLUEプレート (1億円以上)	該当なし	BLOOM GOLDプレート (3000万円以上)	該当なし
ピンクゴールドプレート (1000万円以上)	矢倉 道子 柳内 光子 医療法人眞仁会 第3代理事長 小澤 潔	プラチナプレート (500万円以上)	赤松 秀樹 大畑 直暉・大畑 桂子 近藤 暁子 吉澤 靖之
シルバープレート (100万円以上)	小泉 和彦 後藤 啓二 小森宮 康之 坂本 徹 笹山 周作 重光 勇男 新庄 由美子 武井 建次 田中 雄二郎	戸塚 慎一 中田 嘉之 原 諭吉 藤本 洋一 古川 晴康 吉田 賢一郎 吉野 幸夫 アット・ファシリテラボ株式会社 一般社団法人	東京医科歯科大学医科同窓会 医療法人眞仁会 副理事長 北村 健一郎 医療法人眞仁会 介護老人保健施設なぎさ 施設長 吉積 隆 医療法人社団 優レディースクリニック 東京医科歯科大学歯科同窓会 東京医科歯科大学生活協同組合
ブロンズプレート (30万円以上)	狩野 操 北原 学 木村 恒夫 黒川 三季子 小泉 輝明 後藤 香央里 齋藤 哲胤 齋藤 望 佐尾 温子 品田 佳世子 柴田 順一 菅 三喜夫 添田 弥 武内 和久	竹中 千昭 辻 隆志 土屋 史郎 鶴田 雄一郎 長坂 恵子 中野 はるみ 中元 和也 林 英寛 福本 貴志 藤井 靖久 古江 直一 星 明良 松下 脩 松本 諒真	南 勲 武籙 伸也 森田 重利 矢藤 繁 山下 俊樹 山田 浩史 医療法人定正会 フクダクリニック 株式会社メディカ・ライン 社会福祉法人上智社会事業団 上智クリニック
相原 初美 阿部 美代 石岡 忠夫 石崎 朝世 市村 敏行 伊藤 宏・伊藤 千鶴 犬塚 浩 大杉 武博 岡本 進 加来 裕 狩野 方伸			



「東京医科歯科大学基金寄附者銘板」は、M&Dタワー2階エントランスホールに設置しており、寄附額に応じてプレートの色が異なります。
※金額は個人、法人ともに累計
※対象期間以前に、既に銘板に掲載されている方は含みません



ご芳名録のみのご掲載の方は、
ホームページにて掲載しております。

未来の医療人育成に向けたご支援のお願い

本学は病氣やケガに苦しむ人を一人でも多く救うため、さまざまな病氣に対する治療法や治療薬の開発につながる研究および、世界中で活躍できる医療人の育成に尽力しています。これらの人材育成や研究活動を支えるご寄附および基金を企業や個人の皆様に募っております。医療の発展のために、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

東京医科歯科大学基金 東京医科歯科大学募金室
www.tmd.ac.jp/kikin/ TEL: 03-5803-5068 MAIL: bokin.adm@tmd.ac.jp

TMDU Topics

8/8,9 2020年度オンライン オープンキャンパスを実施

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2020年度のオープンキャンパスはオンラインでの開催となりました。田中雄二郎学長によるご挨拶および学長×学部学生による座談会の動画など、HP上で一部のプログラムを公開していますので、当日参加できなかった方もぜひご視聴ください。



<http://www.tmd.ac.jp/admissions/faculty2/event/opencampus/index.html>

9/25 大学改革アイディアコンテストを 開催

ポストコロナ時代の新しい大学づくりを進めるにあたり、教員、職員、学生にとって、より魅力ある大学環境づくりが進むよう学内からアイディアを募集しました。初の試みにもかかわらず73件の応募があり、9名の方が受賞されました。特賞は、腎臓内科学分野 須佐紘一郎助教の「オンラインセカンドオピニオン 外来開設」。



10/15 東京医科歯科大学は指定国立 大学法人の指定を受けました

東京医科歯科大学は、2020年10月15日に文部科学大臣から世界最高水準の教育研究活動の展開が見込まれる大学として第4期中期目標期間における指定国立大学法人の指定を受けました。今後、研究力を強化するとともに、卓越したClinician Scientist、およびMedical Data Scientistを育成し、国際協働の推進による世界レベルでのトータル・ヘルスケアの実現を目指します。

10/31 M&Dデータ科学センター キックオフシンポジウムを開催

東京医科歯科大学では、医歯学研究・医療・教育をデータサイエンス面で推進する中心的存在として「M&Dデータ科学センター」を2020年4月1日に設置しました。本シンポジウムでは、「医歯学研究の異次元的飛躍を目指して」と題し、学内外の講演者の講演を交えて、同センターの紹介や目指すものについて展望しました。



12/4 歯学系国際シンポジウム2020を オンラインで開催

国際的に歯科同窓生とのグローバルなネットワークを強化するために、歯科研究・臨床・教育に関する情報を共有することを目的として、歯学系国際シンポジウムを開催しました。世界27か国から合計76名が参加し、本学教員、大学院生と元留学生がネットワーキングを深める場となり、また世界の歯科医療従事者・歯学教育者の意見交換の機会となりました。



2/12 四大学連合ポストコロナ社会 コンソーシアム第1回シンポジウムを開催

東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京工業大学および一橋大学は、新型コロナウイルス感染症およびポストコロナ社会に関する研究・教育を推進するため、「四大学連合ポストコロナ社会コンソーシアム」を設立しました。第1回は四大学の教員・学生・関係者に限定しての開催となりましたが、今後も継続的に開催し、人々の健康に寄与する研究成果を発表していきます。

